

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01581

研究課題名（和文）パートナーの親密関係の変容に関する実証研究

研究課題名（英文）The Empirical Study of the transformation of intimacy

研究代表者

山田 昌弘（Yamada, Masahiro）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：90191337

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,560,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本社会の変化に従って、夫婦や恋人などのパートナーとの親密関係がどのように変容しているかを、インタビューと質問紙調査を用いて、実態の解明を試みた。日本では、独身者が増えていることから、特に50代独身者の親密関係について調査を行った結果、現在の親密性に関しては満足しているが、老後、孤立し、更に孤独死する不安が強いことが分かった。続いて、大規模な量的調査の結果、日本の夫婦の親密関係が二極化していることが分かった。その中で、親密性を配偶者や恋人だけでなく、他の存在に親密性を求める傾向が広がっていることが分かった。これを親密性の分散化と名付けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来社会学的実証的研究が少なかった「夫婦間でどのような関係を築いているか」「独身者はどのように親密性を満足させているか」に関する実証的知見を提供するという学術的意義を有する。そして、近年結婚する人が減り、離婚する人が増えている。では、現実に独身者はどのように生活しているのか、夫婦はどのように親密性を築いているかは、社会的関心をもっている。更に、夫婦の親密性が二極化し、愛情が分散化している実態を踏まえた上で、今後の日本人の親密関係を考察する基礎的な資料になると考える。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to elucidate how intimate relationships with partners such as couples and lovers are changing according to changes in Japan society by a mixed research method using interviews and questionnaire surveys. In Japan, the number of single people has been increasing in recent years, and as a result of a survey on intimate relationships among single people in their 50s, we found that although they are satisfied with their current intimacy, they are highly worried that they will become isolated and die alone in old age. Subsequently, a large-scale quantitative survey revealed that the intimate relationship between Japan couples is polarized. For example, there are couples in their 50s who always act together, and there are couples in their 20s who hardly talk to each other. The latter was found to be procuring intimacy outside of the couple.

研究分野：社会学

キーワード：カップル 夫婦関係 親密性 親密性の外部調達 愛の分散化

1. 研究開始当初の背景

戦後から 1980 年頃までは、日本社会の夫婦関係は安定的であった。ほとんどの人が結婚し、離婚率も 10 組に一組程度と低かった。恋愛結婚が普及し、夫婦関係は愛情に基づくものとされた。しかし、日本の夫婦は、欧米の夫婦のような濃密なコミュニケーションをしないことが、従来の研究からも指摘されてきた。研究代表者は、それを当時支配的だった「性別役割分業」と連動するものとして、夫は収入を妻に渡すこと、妻は夫のために家事や育児することが、お互いの愛情表現になっているという意味で、「愛情の性別分業」と呼んだ(山田昌弘『迷走する家族』2005 年、有斐閣)

欧米では、1970 年頃から、パートナーの親密性の変容が生じたとされている。フェミニズムや性革命の影響、さらには、共働き化の推進によって、カップルをつなぐものが、役割から親密性に基づくものへと移行しているという議論が盛んである(A. Giddens 'The transformation of Intimacy' 1992)。その中で、ギデنزは、互いに選び合っていることだけによって成り立ち関係を「純粋な関係性」と名付けた。その結果、欧米では離婚や同棲が増えることになり、愛情と役割の分離が進んだと考えられる。

日本では、1980 年代から未婚化が進み、離婚も増大した。しかし、欧米とは異なり、同棲は増えず、むしろ、法的、そして、経済的関係で結びついている結婚を志向する傾向が強い。野口裕二は、日本では親密性より共同性を重視しているため、親密性の変容は欧米とは異なった形で生じているという。未婚者の交際状況も低迷しており、2000 年以降、恋人がいる独身者の割合が低下し続けている。そして、欧米のように同棲が増える気配はない。更に、離別者の再婚率も低下している。つまり、親密なパートナーがいない人が増大し続けている。

更に、夫婦関係に関しても様々な調査で、セックスレス率の上昇が観察され、離婚率も高止まりし、およそ三組に一組が離婚する時代となった。夫婦間のコミュニケーションが活発になっているとはいえない。

そこで、二つの問いが生まれる。

一つは、夫婦間の親密性はどのように満足されているのであろうか。そして、配偶者や恋人がいない人はどのように親密性を満足しているのであろうか。

後者の問いに関しては、代表者は、独身者の親密関係を調査する中で、パートナーではない関係、そして、バーチャルな関係の中で、満足しているのではないかとこの知見を得ている(山田昌弘「独身者の生活実態」『家族社会学研究』31 - 2, 2019)。

夫婦間の役割分業、そして、満足度などの調査は多いが、実際に夫婦がどのように親密関係を築いているか、いないのか、そして、独身者がどのような親密関係を築いているのかに関する調査研究はほとんどなされていなかった。日本における親密性の実態を把握することは、学問的意義だけでなく、パートナーがいない独身者が増えている日本社会の将来を見ていく上で必要な研究である。

2. 研究の目的

本研究は、日本人の親密欲求がどのように満足されているかを実証的に解明することを目指している。

通常、近代社会においては、夫婦や恋人などカップル関係の間で親密欲求を満足させるべきと言う規範が存在しているので、便宜上、夫婦や恋人などパートナーがいる人と、いない人に分けて、それぞれの親密生活の実態を解明する。

パートナーがいない人に対しては、どのような対象と親密関係を築き、どのような形で親密欲求を満足させているかを分析する。一方、パートナーがいる人に対しては、パートナーとどのような親密関係が築かれているか、そして、パートナー以外の対象とどのような親密性を築いているかを実証的に明らかにする。

特に、パートナーがいない人に関しては、孤立、孤独をどのように回避できるかという観点から分析を深める。

そのため、第一に、中年独身者に焦点を当てて、彼らの親密関係を明らかにすることを目的とする。そして、現役世代の既婚者の親密関係を調査分析することを第二の目的とする。それを比較して、日本社会の親密性の現状と将来について、考察していくことが最終目的となる。

3. 研究の方法

本研究は、家族の親密関係を長年にわたって共同研究してきた研究者グループによる、4 年間にわたる共同研究である。

多様な家族的背景をもつひとが並存している状況に鑑み、インテンシブなインタビューを中心とした質的調査と、質問紙調査を中心とした量的調査を組み合わせたハイブリッドな実証研

究を行った

まず、第一の目的を達成するために、近年増大している中高年独身者に焦点を当てた調査、分析を行った。具体的には、中年独身者8名にインタビュー調査を行い、彼らの親密行動や親密意識、親密関係の満足度などを聞いた。研究期間がコロナ禍の外出制限と重なったので、半数以上はリモートで実施した。その結果に基づき質問票を構成し、50代独身者に対して、質問紙調査を行った。実施方法は以下の通りである。名称 - 『50代独身者の生活に関する調査』2022年2月9-11日実施、マクロミル社のインターネットモニター委託調査。サンプル数1126ケース。50代独身者対象で、2020年の国勢調査に基づき、性別、5歳刻み年齢、未婚、離死別に分けてサンプルの割り付けを行った。

そして、第二の目的を達成するために、前年までの独身者調査結果を参考に、現役世代対象の親密性の大規模調査を2023年2月に実施した。実施方法は以下の通りである。『現代日本人の親密関係調査』2023年2月実施。マクロミル社のネットモニター委託調査。サンプル数10305ケース、うち配偶者あり6398ケース。25-64歳対象で、こちらも国勢調査の結果に基づき、性別、世代、未婚 - 離死別に分けてサンプルの割り当てを行った。

これらの調査に基づくデータを分析し、考察を深めた。

4. 研究成果

(1) 50代独身者の親密性調査結果

* まず、50代独身者の親密関係に関しては、男性独身者は孤立しているものが多く、将来、親密関係がなくなる不安があることが分かった。

まず、インタビュー調査から、女性独身者は離別者が多く、同居子など親族やペット、そして、友達関係で親密性を満足させている人が多かった。一方、独身男性は、スナックのママなど、接待を伴った飲食関係で親密関係を満たす人が複数見られた。

次に、質問紙調査結果を、居住形態別、独身理由別(未婚、離別・死別)、男女別に分析した。独身未婚男性の親密性の欠如を示すものであった。表一にあるように、半数以上が日常的に話す相手がおらず、孤立する傾向が強い。更に、親同居独身者は、大多数が両親を親密性の相手としている。今後、両親がなくなるとともに、孤立する可能性が高く、早めの公的な対策が必要になると考えられる。

表1 家族類型別、普段のできごとをよく話す相手

	いない	両親	兄弟 姉妹	その他 家族親族	恋人	同性の 友人	異性の 友人
男性未婚独居	54.1	11.5	10.6	2.3	5.0	27.6	8.8
親同居	20.7	64.8	17.8	4.2	10.3	29.6	8.0
離死別独居	36.4	13.1	14.1	4.0	20.2	31.3	15.1
親同居	30.8	41.0	12.8	7.7	12.8	30.0	10.3
女性未婚独居	27.1	20.3	22.0	11.0	7.0	41.7	7.7
親同居	10.4	64.3	21.7	7.8	11.1	48.0	7.4
離死別独居	21.2	14.4	17.3	19.2	16.3	40.4	8.7
親同居	8.9	48.9	22.2	33.3	11.1	33.3	11.1
他同居	8.0	18.6	21.2	46.9	10.0	29.2	11.5

一方、女性は孤立する人は男性に比べ少ないが、収入が少ないため、現在、同居親に経済的に依存する者も多数存在している。将来生活への不安を感じる者の割合は高い。全体では、四人に三人が、将来の孤独死の不安を感じている。収入、貯金や子どもや恋人の存在が、これらの不安を低減させる効果はあるが、部分的であった。

表2、 将来不安

将来、高齢になって下記のような不安がありますか」の回答(全体、%)

	大いにある	ある	あまりない	ない
1. 経済的に十分な生活ができなくなる	45.6	31.5	14.3	9.6
2. 十分な介護が受けられなくなる	42.2	36.9	12.9	8.0
3. 孤立して寂しい思いをする	34.2	34.3	20.4	11.1
4. 孤独死してしまう	41.7	33.0	15.7	9.5

(2) 日本の夫婦、カップルの親密性調査結果

* カップル関係の二極化

次に、2023年の夫婦を中心とした質問紙調査の結果を示す。

研究成果をまとめれば、パートナーがいる人(配偶者、恋人)は、親密関係が二極化していること、そして、パートナーがいてもいなくても、パートナー以外の親密関係が重要な要素になって親密性を充足していることが分かった。これを、愛情の分散化と名付けたい。

夫婦や恋人同士のパートナー関係では、様々な親密性に結びつく関係性を調査した。従来よく聞かれる「会話の頻度」「夕食を一緒に食べる頻度」「性関係の頻度」などに加えて、「外出するときに手をつなぐ」「同じ布団で寝る」「愛情を言葉で表現する」など、親密関係をより深く表すと思われるいくつかの項目を尋ねた。

すると、カップルの親密関係が多岐に渡り、二極化していることがわかった。例えば、寝方に関しては「同じベッド、布団で寝る」夫婦も26%いる一方、違う部屋で寝ている夫婦も36%いる。また、出かけるときに手をつなぐのは38%、全く手をつながない夫婦62%となっている。

また、コミュニケーションでも、多くは日常的会話をしているが、愛情を言葉で表現するとなると、全くない夫婦が半数弱を占める。

これは、恋人同士でも傾向はあり、愛情を毎日のように表現するカップルもいれば、ほとんどないカップルも相当数存在している。

これは、夫婦はもちろん恋人関係でさえも、愛情を言葉で表現することはあまりないという結果である。

表3 この一年に次のようなことはありましたか(既婚者対象)

	ほぼ毎日、週数回	週1回	月数回	それ以下	全くない	
日常的なできごとを話す	67.6	20.5	4.3	2.6	3.0	2.1
愛情を言葉で表現する	8.3	5.4	4.4	6.7	31.1	45.5

表4 この一年に次のようなことはありましたか(独身で恋人がいる人対象)

	ほぼ毎日、週数回	週1回	月数回	それ以下	全くない	
日常的なできごとを話す	39.9	25.1	12.8	12.0	8.5	1.9
愛情を言葉で表現する	13.2	12.6	10.7	16.1	34.9	12.5

更に、相手に恋愛感情をつとはいえない夫婦も相当数存在していることがわかる。例えば、「相手にドキドキやドキドキを感じる」では、よくある4%、時々ある14%、たまにある26%で、まったく感じない夫婦は53%。また

全体的には仲がよいと評価していても、性関係や恋愛感情を失った夫婦が多数を占めている。では、ロマンティックな感情や性欲はどこで満足しているのだろうかというのが、次の愛情の分散化に関する項目である。

(3) 愛情の分散化の実態

愛情の分散化の実態を知るために、様々な質問を用意した。

ロマンティックな感情を満足させるための一つの手段に「推し活」がある。アイドルやキャラクター、アスリートなどを好きになり、応援する活動である。よくする、時々する、たまにする、めったにしない、したことがないの分布は、4.3%、8.1%、9.3%、13.9%、64.5%である。世代別、性別だと、独身25-34歳女性では、17.2%、23.2%と4割のものが、推し活を日常的に行っていることがわかる。ただ、既婚35-44歳女性でも7.3%、9.3%と、15%のものが日常的に行っていることが分かる。

次に、「性的サービス産業に行く」では、全体だと、0.3%、2.1%、4.9%、15.9%、76.8%だが、独身25-34歳男性では、1.2%、5.8%、同じく既婚25-34歳男性では、0.4%、5.0%となる。更に、既婚男性では、0.8%、7.1%が、配偶者以外の異性と日常的に性的関係をもっている。

まとめると、男性は、性的サービス産業やキャバクラなどの接客業、配偶者や恋人以外の異性に、女性は推し活に、親密感情を求める傾向がみえてくれる。独身者の親密性のみならず、恋人や配偶者がいる人であっても、様々な親密関係を、様々な対象に対してもっていることがわかる。

今後は、どのような人々が、どのような形で愛情の分散化を行っているか、更なるデータ分析を通じて分析、考察していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山田昌弘	4. 巻 25
2. 論文標題 コロナ禍が日本家族に与えた影響について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中央大学社会科学研究所年報	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山田昌弘
2. 発表標題 コロナ禍が家族に与えた影響について
3. 学会等名 関東社会学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山田昌弘	4. 発行年 2024年
2. 出版社 朝日新聞出版	5. 総ページ数 275
3. 書名 パラサイト離婚社会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	施 利平 (Si Ripin) (20369440)	明治大学・情報コミュニケーション学部・専任教授 (32682)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	永田 夏来 (Nagata Natsuki) (40613039)	兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授 (14503)	
研究分担者	土屋 葉 (Tsuchiya You) (60339538)	愛知大学・文学部・教授 (33901)	
研究分担者	千田 有紀 (Senda Yuki) (70323730)	武蔵大学・社会学部・教授 (32677)	
研究分担者	羽瀨 一代 (Habuchi Ichiyo) (70333474)	弘前大学・人文社会科学部・教授 (11101)	
研究分担者	須長 史生 (Sunaga Fumio) (80349042)	昭和大学・教養部・准教授 (32622)	
研究分担者	谷本 奈穂 (Tanimoto Naho) (90351494)	関西大学・総合情報学部・教授 (34416)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------